

現代社会と若者たちを活性化させる15のキーワード

# 機会多様化・

# 受験生志向

# 8

現代の大学入試は驚くほど多様化している。前期・後期はまだしも、地方入試にAO入試など種類が増えただけでなく、試験科目についても様々な方式がある。数多くの個性や特性を持った受験生を獲得することが目的であり、専修大学も例外ではない。だが、その背後には確固としたコンセプトが存在する。

## 「地区入試」が象徴する 専修大学の意識改革

専修大学では、東京の大規模大学に先駆けて、2001年度から「地区入試」を実施してきた。当初は札幌、仙台、新潟、名古屋、大阪、広島、福岡の7都市と、大学の神田キャンパス（東京）、生田キャンパス（神奈川）の合計9カ所。地方だけでなく、神田や生田でも実施されるため、地方入試ではなく、「地区入試」と呼ぶ。

現在では長野と金沢が加わり、合計11カ所に増加。それまで地方の受験生は、東京までの交通費や滞在費などを負担してきたわけだから、可否はともかくとして、便利な制度であることは間違いない。受験回数が増加にもつながる。



入学試験委員会委員長  
小藤 康夫 教授

であるなら、なぜ、2001年度まで導入されなかったのだろうか。少子化による受験生の減少と大学間の競争激化が背景にあるのはもちろんだが、それだけではあまりに皮相的である。

18歳人口がピークを迎えた1990年代初頭には、暮張メッセや東京ドームを受験会場にする大学もあった。キャンパスだけでは収容できないほどの受験生が押しかけたからだ。つまり、この頃の大学は「学生がやってくる」こ

とに誰も疑いを持っていなかった。

だが、1993年からは18歳人口が減少の一途。かくて2007年度には、全志願者数と大学の全定員数が同数という「大学全入時代」になるといわれる。こうした流れの中で、いち早く「学生の近くに outward」という真逆の発想を実現したのが、専修大学の「地区入試」なのである。一般入試試験も、前期は水戸、大宮、津田沼、横浜、静岡の5カ所に加えて神田、生田の自由選択。

「学部個別だけでなく、併願校とバツティングした時に便利な全学部試験を2007年2月に実施する予定です。学内だけで行う試験に比べて手間や多額のコストがかかりますが、要するに受験生が自分の都合や、自分の得意分野に合わせて選べる機会を多様

化したということなのです」（入学試験委員会委員長、小藤康夫教授）

大学は教育機関であり、その意味では受験生にも大学の特色をしっかりと理解してほしい。入試制度の多様化とは、一元化された入試・近視眼的な入試からの脱却である。

## 学部の個性に対応した 各種の推薦入試

大学案内書である「入学ガイド」でも、多様な入試制度を「受験機会を増やしたい人」には「地元で試験を受けたい人」には「英語・国語・選択の3科目入試をめざす人」には「1科目でも得意科目を持つている人」には「英語が得意な人は「数学が得意な人は「国語が得意な人は」と、分かりやすく整

理されている。さらに同一試験日の中で併願した場合、受験料の割引制度もある。

こうした入学試験に加えて、各種の推薦入試も用意されているが、そのすべては学部からの要請を根拠としている。経済学部国際経済学科では英語力が必要となるため、英検やTOEFLなどで所定のスコアを取った人を対象とする英語資格取得者推薦入試。商学部では商業高校の生徒に進学のチャンスを広げる公募制推薦入試。ネットワーク情報学部では、積極性や志の高さを問うAO入試など。指定校制推薦やスポーツ推薦は説明不要だろうが、川崎市との提携により、同市の職員と人材育成プログラムを相互提供する目的とした、KSパートナーシップ入試（二部）という制度もある。

大学一律のAO入試などを実施していないことから、単なる受験生確保が目的でないことは理解できるはずだ。

「一般入試も含めて、全国各地から多様な学生に入学していただきたい。だからこそ多様な入試制度があるのです」（前出・小藤教授）



入学センター  
伊藤 隆敏 部長

「受験生にとっては、職員や教員による大学説明より、受験生に年齢も近い大学生のほうが親近感が持てるばかりでなく、情報提供の内容や方法なども変わってくるはずということで、2005年4月から実施しています」（入学センター、伊藤隆敏部長）

基本的にはボランティア。にもかかわらず発足2年目は約70人が登録しており、今年の夏もオープンキャンパスの企画からピラ配り、「学生トーク



今年の夏に開催されたオープンキャンパスでも、学生スタッフによる「トークLIVE」は盛況だった

## 学生スタッフによる 入学支援

入試制度以前に、専修大学を受験するということ意思決定が必要になるが、オープンキャンパスから入試情報まで、こちらも受験生志向の精神が際立った特徴となっている。中でも学生スタッフの活躍は、専修名物になりつつある。

## Student Opinion

この夏のオープンキャンパスで活躍した2人の学生スタッフに、参加理由や感想を聞いた。

近岡創さん法学部法律学科3年



「自分の受験時から、高校生に近いレベルで大学を紹介したほうが良いと感じていたので、参加を決めました。今年の夏のオープンキャンパスでは、受験生が聞きながら聞いている情報を、少し前まで同じ状況にあった自分たちの口から伝えようと、男女の学生がペアになって大学生活や受験を語りあうトークLIVEを企画して運営しました。

基本的にはボランティアですが、この2年間やってみて、何ひとつ損したと感じたことはありません。それどころか、今年は「合格したので学生スタッフになりたい」という新入生もいて、ちょっと感激しました。

名古屋の出身なので、とにかく東京に行きたいということから専修大学を選んだのですが、活気があつて積極的な学生が多いですよ。学園祭もにぎやかで、ゼロからサークルを作ったり、ベンチャービジネスを起業する学生も珍しくありません。そんな専修大学の本当の姿を、もともとと広く伝えていきたいですね」



市之瀬冴子さん文学部人文学科3年

「大学の行事でアルバイトをした時に、先輩に学生スタッフという仕事があることを紹介されて、参加することにしました。オープンキャンパスでは、年齢が近いせいから、高校生から「学食はどこにあつて、おいしいですか?」なんて、先生には聞きにくいことをいろいろ質問されました。お姉さんみたいな存在なのでしょね。今年の経験をもとにこれからは、そんな率直な質問を入学案内などにもうまく反映させていきたいと考えています。

学生スタッフの経験も含めて、専修大学に来て本当に良かったと思います。特に、先生が学生の興味をうまく引き出すような授業をしてくれるので、勉強が自然に楽しくなってきました。現在は中南米の民俗楽器のサークルのリーダーとして、学園祭に出す企画を検討中です。これまではリーダーを引き受けるタイプではなかったので、やはり少し成長できたかなと自負しています」

予定です」（前出・伊藤部長）

こうした活動や授業を通して、学生は4年間で大きく成長する。それが、大学が提供すべき本来のな使命なのである。

なお、神田・生田キャンパスともに、入学センターインフォメーションを開設。大晦日と元日を除いて、1年363日オープンしており、質問や入学相談などに応じている。